語釈 ： インターネット Twitter 上でみる Trump 前米大統領の英語（38）
(A Basic Way of Reading Trump-Language)

後　藤　　寛

In the beginning was the Word. (cf. From the first he was the Word. ― BBE：*The Bible in Basic English*)「初めに語（神）があった」は新約聖書ヨハネ福音書・第１章第１節(St. John 1:1)の有名な記述であるが、これは人間というヒト種より先にあったものが Word だという意味となる。SIT-SEN(Situation-Sentence)というが、ではそもそも situation（状況）／sentence（文）とは何か？ 文の S はどこから来るのか(Where does the S come from?)？ situation は本連載(34)でも見た Basic 語 **seat** などと同系、sentence は Basic 語 **sense** などと同系なのであるが、このあたりを含めてもどうとらえるか？

反復による repeated pattern practice はダメで、SIT-SEN(SEN-SIT)から「英語で考え sentence が自然と出てくるように」などと、きれいごとを言うのみでは実際には身につかないし、問題は本質的に何も解決しない。口先だけではなく説得力をもつ本格的理論追究が必要となる。「英語で考えなさい」のような類のものは非母語話者には現実味と具体性を欠く。結果として出てくる文（S）は N. Chomsky 風の deep structure（深層構造）が関わっているし、surface structure（表層構造）に具現する word やその結合体の sentence そのものは、所詮はやはり数学的な F. de Saussure の structural linguistics（構造主義言語学）風の慣用的 pattern（パターン）にのっとったもののはずだろう。

今日、新研究が次々となされているが、evolutionary linguistics (evolingo)〔生物進化言語学〕/ generative biolinguistics（生成生物言語学）というヒトという種(species)の言語研究の新理論も出てきている。科学か宗教かの問題ともなる。本連載では今日的な広範囲にまたがる言語研究を意識しているが、将来的には博士号(Ph. D)を有する若手の研究者の研究テーマとなろう。関連し、言語が種（しゅ）としてのヒトからヒトへの一種の感染(infection)？とみれば言語習得(language acquisition)とは、DNA を含む特殊で良性のウイルス？がヒト種の脳(brain)に感染・侵入することか？それをいわゆる生物学的な宿主(しゅくしゅ：host)と寄生(parasite)で説明できるか？などと飛躍してみたくもなる。

今回は次の２例を見てみる。

(1) Just had a wonderful conversation with @Pontifex Francis offering condolences from the People of the United States for the horrible and destructive fire at Notre Dame Cathedral. I offered the help of our great experts on renovation and construction as I did in my conversation yesterday with President @EmmanuelMacron of France. I also wished both Pope Francis and President Macron a very Happy Easter ! (April 17, 2019)

▲今回もこの tweet を回転寿司ならぬ回転英文母型の MSOE スクリーン（仮称）〔本会 *Year Book* 2021 (No. 73) 参照〕上に載せ、structural linguistics 的な英語のパラダイム体系(paradigmatic system)からその統合関係(syntagm)の一端を見てみる。

Matrix Screen of Output English (MSOE [émsou])

STATEMENT			
		THEME : NP	**RHEME : VP**

STR	C/C	N_1	COP／V	N_2／N_3／A	ADV
1	ϕ	ϕ	Just had	a wonderful conversation	with @Pontifex Francis /
2	ϕ	ϕ	offering	condolences	from the People of the United States
3	ϕ	ϕ	ϕ	ϕ	for the horrible and destructive fire
4	ϕ	ϕ	ϕ	ϕ	at Notre Dame Cathedral. //
1	ϕ	I	offered	the help of our great experts	on renovation and construction /
2	as	I	did	ϕ	in my conversation yesterday
3	ϕ	ϕ	ϕ	ϕ	with President @EmmanuelMacron of France. //
1	ϕ	I	also wished	both Pope Francis and President Macron /a very Happy Easter ! //	ϕ

（備考）単一斜線（／）は各文での意味的２分割線。

この tweet は文層(STR：stratum)に深み(depth)はなく浅いが、N_2 (N_3) と ADV がやや重いことが分かる。一般にこの類の文での readability（可読性）は難度が増す。

内容は宗教とも関わるものであるが、Trump 大統領がフランスのパリで起きたノートルダム寺院（大聖堂）の衝撃的な大火災に関し、フランシスコ(Francis)・ローマ教皇との電話会談で遺憾の念を伝えるとともに、復興と再建のため米国から専門家を派遣する旨をマクロン(Macron)・フランス大統領に申し出たというものである。同時に、ローマ教皇とマクロン大統領に Easter（復活祭）の祝辞を伝えたと言っている。

Trump 氏はこの２日前にテレビ映像を観て、Twitter に次の tweet を投稿していた。

So horrible to watch the massive fire at Notre Dame Cathedral in Paris.　Perhaps flying water tankers could be used to put it out.　Must act quickly !　(April 15, 2019)

「消火には放水用の航空機を使い迅速にやる必要がある」と言っているが、映像を観た人は誰もそう思ったであろう。ノートルダム大聖堂はユネスコの世界文化遺産である。

この tweet をまたも談話文(discourse)の３つの深層意味素(deep sememes)に分けて理解すれば i) **ABOUT**：ノートルダム大聖堂の火災、ii) **BECAUSE**：消火には空からの放水が必要、iii) **PLEASE**：敏速にやって欲しい、のようになる。i)の ABOUT は thematization（テーマ化）であり、何かを語るときまずは真っ先に意識にのぼる最も基

本的な深層意味素と言える。これが明確でないと here, there の deixis（直示）と関わる anaphora / cataphora / exophora（前方・後方・外部照応関係）が崩れ、意味が不明・不透明となる。次にこの文も MSOE スクリーン上に映し電光掲示板風に動かせてみる。

STATEMENT					
		THEME : NP	RHEME : VP		
STR	C/C	N_1	COP／V	N_2／N_3／A	ADV
1	ϕ	ϕ	ϕ	So horrible /	ϕ
2	to	ϕ	watch	the massive fire	at Notre Dame Cathedral
3	ϕ	ϕ	ϕ	ϕ	in Paris. //
1	Perhaps	flying water tankers /	could be used	ϕ	ϕ
2	to	ϕ	put	it	out. //
1	ϕ	ϕ (= They) /	Must act	ϕ	quickly. //

（備考）単一斜線（／）は各文での２分割線。

これではっきりする。ここでは深層での thematization の the massive fire at Notre Dame Cathedral が 表層上では RHEME：VP として N_2・ADV となり具現している例ということになる。この tweet は文層が浅く情報処理上で負荷は特にはかからない。

語釈で太線語 cathedral（大聖堂）の原義を確認しておきたい。本連載(1)の③、および(34)でも扱ったのであるが、PIE etymon の音素形/SED/に由来し「座って動かないこと」が原義で前回、また上でも見たが Basic 語 **seat, side** などと同系である。cathedral は un-Basic 語 chair とも語形が似ていることが読み取れるだろうか？同系語であり、元々は「司教が座る所」が cathedral である〔拙著(2016)「松柏社」、第二部、例(63)参照〕。

なお、下線とした of はこういう場合もちろん in ではない。

(2) “Donald Trump was being framed, he fought back. That is not Obstruction.” @JesseBWatters I had the right to end the whole Witch Hunt if I wanted. I could have fired everyone, including Mueller, if I wanted. I chose not to. I had the RIGHT to use Executive Privilege. I didn’t！ (April 18, 2019)

▲これは深い意味をもっている。政治評論家の@JesseBWatters 曰く、「D.トランプははめられたので抵抗したのだ、それは司法妨害ではない」。これを受けて Trump 大統領は「自分には魔女狩りを止めさせる権利はあった、特別検察官のモラーを含めて誰でも罷免させることはできた、しかしそうはしなかった、自分には特権を執行する権利があったが、執行しなかったのだ」と言っている内容である。まさに近代的人間社会における「法の支配」ということで、No one is above the law.（Basic で言えば No one is greater than the law.）という精神につながっている。

太線語 privilege（特権）のスペリングを難しいと感じる人は多かろうが、これは Basic lexemes（Basic 語彙素）の **private** ＋ **law** である〔law は本連載(30)ですでに見たし、実は合わせて privilege も見た〕。privilege は{privi (= private) + lege (= law)}で、まさに特権とは「私的で法的な権利」ということになる〔同上拙著、第二部、例(87)参照〕。

ここで前々回(36)、前回(37)で見た「心的２拍子リズム」を、上の tweet 例(1)で確認してみる。上での MSOE モデルを介した readability（可読性）から今度はここで音声面からの audibility（可聴性）の問題を含めて確認しておこう。

語の弱音・強音で感知する英音の心的2拍子リズム(mental prosody)

（弱音系）	（強音系）
ϕ	Just had
a	wonderful conversation
with	@Pontifex Francis
ϕ	offering condolences
from the	People
of the	United States
for the	horrible and destructive fire
at	Norte Dame Cathedral. //
I	offered
the	help
of our	great experts
on	renovation
and	construction
as I	did
in my	conversation yesterday
with	President@EmmanuelMacron
of	France. //
I	also wished both Pope Francis
and	President Macron
a	very Happy Easter ! //

Trump 氏は元々が強音系の語をさらに強勢を置いて発音したり、一般には弱音系の語にも強勢を置くこともきわめて多い。したがって日本人の聴覚脳には彼のアメリカ東部訛りのあの英語の enunciation（発音法）は audibility がある部類に入ると言える。

ここでの弱音系と強音系の２拍で感じる rhythm（intonation ではない）とともに、音と意味の仕組みとその一体化の感覚がいかに受けとめられるかであるが、いずれにせよ英文の読み聴きでの理解法上のメカニズムがこれで簡素に示されるだろう。まずは強音系の語句の縦読みで意味を直感するのである。次に弱音系の語句との関連性・融合性を考えるのである。弱音系語句は場合にもよるが意味提供そのものにはあまり関与しない。

これは受動的に英音を聴取する hearing の問題とも絡む。本連載でもたびたび触れたが、英音で日本人の民族聴覚脳で問題なく処理できるのはせいぜい声の抑揚としての intonation だけである。日本人は弱音と強音の織り成す rhythm（rhythmic isochronism：リズムの等時性）に乗った本物の呼吸法による英語の‘sound’が聴けず、よく聞こえる声音の intonation ばかりをフワフワと聴いているので、いつまでたっても英音に耳が開かない。英語の真音は上記と関わるが、生物学的に人体の腹部から胸部を経て口腔、鼻腔までの気道(respiratory tract)、それも特に咽喉(larynx)の作用で生み出される。